

## 第7回 決算書アナリスト試験・出題の趣旨

**問題の構成と内容：**構成は、毎回、選択問題（第1問）、収益性の問題（第2問）、安全性の問題（第3問）、投資に関する問題（第4問）となっており、その内容構成は変わらない。即ち、企業活動の分析としての収益性と安全性、および投資家としての分析になっている。

**第1問** は、選択問題であり、第2問以降の問題で触れられなかった事項を問い、分析の総ての範囲の知識を問うことをねらっている。

テキスト（第3版）により、各問の該当ページを示しておく。

1	2	3	4	5	6	7 <sup>*1</sup>	8	9	10 <sup>*2</sup>
p.28	p.36,42	p.14	p.39	p.56	p.49	p.18	p.18	p.21	p.68

※1. この問いは**第4問**と連動させ、株主資本等変動計算書を精読させることを意図している。なお、評価損益であることを注意。

※2. この問いは**第4問**の安定配当堅持のための政策（手段）に関わるものである。

なお、**7**と**10**問は、従来の財務諸表分析では、株主資本等変動計算書が取り上げられることは少なかったと思われるので、この計算書の学習も必要なことを知って欲しいという意図に基づく。

**第2問**は、収益性に係る問題である。

ここでは、薄利多売の経営方針から値幅の高い商品を扱う経営への方針転換を図りつつある実際の企業の決算書を取り上げている。

ところで、分析の問い掛け（アプローチ）であるが、最初から情報として企業の現状を理解している場合には、それに関わる指標を取り上げるアプローチが採られるであろう。しかしながら、（事前情報が不明で）決算書数値から、つまり白紙の状態から分析対象企業の姿を把握しようとするれば、全体の数値つまりROA（テキスト、p.38）の計算から入っていくことになる。それが**問1**である。

次に、そのROAがもたらされた原因を探るには、利益率（テキスト、p.44）と回転率（テキスト、p.48）に分解していかなければならない（テキスト、p.35）。それが**問2**である。ここでは、計算結果に基づく評価にも触れている。

ところで、一般に、薄利多売では回転率で利益を稼ぐことになるが、利幅で稼ぐ場合には回転率が落ちることは覚悟の上である。**問3**では、具体的に利幅つまり粗利（テキスト、p.45）の変化を確認するとともに、方針転換の成否の判断も問うている。

最後に、方針変更による企業の行動が損益計算書のどこに計上されるかを問い、損益計算書の見方つまり企業活動の把握の仕方を問うている。これが**問4**である。

**第3問**は、安全性に係る問題である。

ここではまず、安全性の基本的指標の計算を求めている。つまり、**問1**で、流動比率（テキスト、p.53）、総資産負債比率（テキスト、p.60）、固定長期適合率（テキスト、p.62）を問うている。

これに続く問い掛けとしては、「第2問」のように、更に分析を進め、安全性に関する詳細な指標を問うていくという方法（深化させていく方法）もあるが、ここでは、基本的指標のあるべき姿（論理的に求められる指標の値）を問うという形を取っている。これにより指標計算作業の目標と意義が理解されると思う。これが**2問**である。

さらに、安全性の判断においては、貸借対照表のストック情報だけでは不十分であり、将来の学習として、フロー情報つまりキャッシュ・フローにも目を向けなければならないことも学習させようと思図している。

コロナ禍の中、企業の体力が問題になっている。本問はこのような現実を意識し出題している。但し、体力として安全性（財務状況）言わば基礎体力のみでは完全とは言えない。そこで、会話の最後に、体力維持増強のため収益性についても忘れないようにと一言付け加えておいた。

**第4問**は、本試験の目的2本柱のうち2本目（1本目は、企業活動の分析と評価：今回第2問と第3問）の「投資」の問題を扱っている。

投資においてまず考えるのが、投資の果実である配当であり、これを支える利益である。**問1**と**2**は、これ即ち、配当利回り（テキスト、p.73）、配当性向（テキスト、p.42）、株価収益率（テキスト、p.73）を問うている。

ところで、従来の決算書いわゆる財務諸表分析では、株主資本等変動計算書に焦点が当てられることは少なかったように思われる。しかしながら、企業資本の調達活動は利益獲得活動の前提として必須のものである。そこで、将来の学習の方向性も示すべく、株主資本等変動計算書も取り上げた。それが**問3**の**a**である。ここでは、安定配当政策を採り、当期の利益以上の配当を行っている企業を探し出し、その政策実行の仕組みを理解させることを意図している。**b**はその政策を採った企業の株価の評価を問うている。利益が減少しそれに見合う株価の低下がなければ（この例では株価に大きな下落はない）、割高になるのは当然である。

この試験で予定しているのは、株式売買による売却益を求める“投機家”（証券市場への投資家）ではなく、（企業への）投資家である。ここでは、しばしば見られる、敢えて言う「割高・即売り」というような投機的行動の問題点も提示することになればと願っている。

**最後に：**本試験は会話形式の出題も採用しているが、この意図を述べておきたい。

一般に、検定試験と言えば、正答のみが求められ、その意味や背景は問題にされていないように見受けられる。しかし、本試験では、問題を導く会話文の中で問題の様々な背景（経済的及び社会的、時に人生に関わる背景）に触れることにより、受験者には、合否に関わらず、とくに試験後の復習において、これらの事情を再考し、単なる正誤を超える収穫をもたらせられたら、と願っている\*。

\*指導の先生にも僭越ながら本試験終了後の話題の提供になれば、この上もない幸せである。